

目次

はしがき(献辞に代えて).....	一
吉田澄夫博士略年譜.....	七
吉田澄夫博士著作略目録.....	九
語彙論における同相 ^{ホモロジ}	一
——全体社会の語彙と部分社会の語彙と——	
室町時代における諸宗派の注釈書.....	一
——語学資料としての調査の第一歩として——	
柳田 征司.....	二九
『康富記』の語彙——室町期語彙「斑」.....	一
中山 緑朗.....	二九
接頭語「御」を冠した形容詞の敬讓表現について.....	一
坂詰 力治.....	二九
——お伽草子を中心として——	

古活字版日本書紀抄と兩足院藏神代上下抄……………	小林 千草……………	八
——待遇表現に関する語の相違——		
近代文語における終助詞ナムの変容……………	櫻井 光昭……………	一〇三
『天草本平家物語』における連体形準体法について……………	信太 知子……………	三
——『寛一本』との比較を中心に消滅過程の検討など——		
江戸初中期の「ないで」について……………	外山 映次……………	一四
狂言古本の本文比較——虎清本と虎明本——……………	林田 明……………	一五
『虎清本』に見られる一・二人称代名詞の待遇価値……………	池上 秋彦……………	一七
近世語における撥音添加の現象について……………	岸田 武夫……………	一〇七
——主として連音関係について——		
小喃と言語生活……………	宇野 義方……………	一三七
「暮する」「済まする」のような言い方……………	鈴木丹士郎……………	一四三
——近世文語の一問題——		
川柳(前句附)の語彙——粹・意気・通をめぐって——……………	大橋 紀子……………	一五九

国語学と蘭語学との交渉……………

杉本つとむ…………… 一六

——中野柳圃の説を中心として——

『大藏本能狂言』における衍字・脱字の校訂について…………… 小林 賢次…………… 一三三

『よしの冊子』と武士の言葉…………… 金田 弘…………… 一三三

——オレ・貴様、シャル・サツシャル、オしニナルなど——

『百人一首峯梯』における使用漢字…………… 矢野 準…………… 一三三

式亭三馬の作品における三・四文節文の構造…………… 斯林不二彦…………… 一六

浮世風呂における女性の人称と階層…………… 小松 寿雄…………… 一〇三

浮世風呂・浮世床の「のだ」文…………… 土屋 信一…………… 一三三

『東海道四谷怪談』において上方風の言葉遣いをす

る人たち…………… 古田 東朔…………… 一七

山形県置賜地方の説話…………… 阿部 八郎…………… 一〇

「言いシマウ」から「言ッチャウ」へ…………… 田中 章夫…………… 一〇九

——江戸語東京語の完了形——

『布令字弁』の成立と成長……………	松井 利彦……………	三二
『スウィントン万国史』の翻訳……………	進藤 咲子……………	三三
露都創刊日本語典の文例——百年前の国語——……………	吉町 義雄……………	三六
「紅茶」と「コーヒー」……………	天沼 寧……………	三七
えびす神の地名字……………	鏡味 明克……………	三〇
京言葉における幼児語……………	寺島 浩子……………	六一
「人づくり」問題……………	江湖山恒明……………	六九
『春秋會話篇』攷——サトウ『會話篇』書誌覚書——……………	松村 明……………	七〇
京都千本閻魔堂の大念仏狂言と閻魔堂節の性格……………	井之口有一 山口 幸洋……………	七三
近代語学会研究発表会記録……………	……………	七五
『近代語研究』第一集と第六集総目次……………	……………	七五
近代語学会研究発表者・『近代語研究』執筆者索引……………	……………	七〇
執筆者略歴……………	……………	七三

吉田澄夫博士略年譜

明治三十五年六月十七日	新潟市に生まれる	
大正八年三月	新潟県立新潟中学校第四学年修了	
九月	新潟高等学校文科甲類入学	
大正十一年三月	同校卒業	
大正十二年四月	東京帝国大学文学部国文学科入学	
大正十五年三月	東京帝国大学文学部国文学科卒業	
四月	文部省国語調査嘱託	
昭和九年十二月	国語審議会書記	
昭和十五年十二月	国語調査官	
昭和十九年十一月	専ら現代かなづかい・当用漢字等、国字改善の原案作製の衝にあたる	
昭和二十年十一月	高等官三等	
十二月	従五位	
昭和二十二年十月	埼玉師範学校教授	
昭和二十三年七月	国語審議会臨時委員	

おぬし

この語の用例はすべて男性によるものであるが、「薬水」で複数の聞き手に対して用いた「おぬしたち」の形をとるものを含めると二十例に達する。その代表的なものを挙げると、

- 。いや〜とにかくにおぬしがたついつつして…さけがしまぬこゝへよろしめ…(猿座頭・7ウ7、座頭↓女共。ほかに一例)
- 。…おぬしはまず。これにだまつて。さきにいふたごとくにして出さしめ(禁野・10ウ7、雉領の者↓素破)
- 。さらばおぬしいさしめ(禁野・14オ5、大名↓雉領の者。ほかに二例)
- 。それがしはおぬしをいころいてかへらう(禁野・16ウ8、雉領の者↓大名。ほかに一例)
- 。…おぬしは。…子どもがめまじすれと。がてんせいで。(泣尼・24オ6、僧↓比丘尼)
- 。おぬしがそれをみるによつて。おぬしがかほが。うつるによつて。…(鏡男・30ウ4、5、男↓女共)
- 。…いつおれが。かだをしたことがあるぞ。たゞおぬしにかゝつてしからるゝまでよ。(文荷・34ウ1、二郎冠者↓太郎冠者。ほかに一例)

。さいぜんそれがしももつ。又おぬしもたしました。(文荷・35ウ3、太郎冠者↓二郎冠者。ほかに五例)^(注16)

。やい〜。おぬしたちは此所じやといふが。…。(薬水・49ウ7、祖父↓孫たち)

の如くで、次のように整理できる。

I 目上の者から目下の者に…大名↓雉領の者、祖父↓孫たちの計四例。

II 親しい間柄の対等またはやゝ目下(目上)の者に…太郎冠者↓二郎冠者、雉領の者↓素破の計九例。

III 夫から妻に…座頭↓女共、男↓女共、僧↓比丘尼の計五例。

IV 目下の者から目上の者に…雉領の者↓大名の二例。

そこで「おぬし」の待遇価値は、現代語の「お前」に似ているものゝやゝ違いもあって、身分の上下関係にかゝらず話し手

の聞き手に対する親しみを表わすのが基本で、それぞれの場面に応じて微妙に揺れ動く話し手の心情が込められている、と考えてよからう。^(注17)すなわち「大名↓雉領の者」の場合にはむしろ「へり下り」あるいは遠慮もしくは驚怖の気持ち、「雉領の者

↓大名」の場合は逆に軽卑あるいは威赫の気持ちを表わしていると思われるのである。また『虎清本』において「おぬし」の用いられている全箇所を『虎明本』で当たってみると、まず「雉領の者↓大名」の場合は「おぬし」あるいはそれに代わる代名詞が欠落して、『虎清本』に見られるやゝ例外的な「おぬし」の用例を『虎清本』では意図的に避けたとも考えられる。また「大名↓雉領の者」のうち「一だんをもしろい。おぬしはたゞ人ではおりにないぞ」(『虎清本』が「一だんおもしろひ、そなたはたゞ人^(注18)にはおりにないぞ」(『虎明本』)となつて注意しなければならぬ。このように見ると、『虎明本』には筆者の意図的な「用語の整理・統合」の手が加わっていたと想像される。

おのれ

この語は、男性が用いて複数を表わす接尾語「ら」および罵り卑しめる意の接尾語「め」のついた形を含めると、

。さて〜女といふものは。くだらぬものじやようみよ。おのれがつらがうつつて。みゆるわいはい(鏡男・31オ5、男↓女)

。それはおのれが。はらをたてゝみるによつて。さやうにみゆるわいはい。(31ウ1、同前)

。やい。おのれらそれは何事ぞ。…どこへにげおる。(文荷・39オ2、主人↓太郎冠者・二郎冠者)

。…おのれはかにのせいじやが。…といひおるか。(蟹山伏・41ウ1、強力↓蟹の精)

。おのれめはすいさんなやつめじや。(41ウ6、同前)

。…おのれのりころいてくれうか。(蟹山伏・42ウ1、山伏↓蟹の精)

。いておのれのりころいてくれう(42ウ4、同前)

。…おのれらにつかわれうか。にくい事をなゆいおつそ。(薬水・47ウ4、祖父↓孫たち)

『虎清本』に見られる一・二人称代名詞の待遇価値